
西の砂漠で

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

西の砂漠で

【Nコード】

N5367A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

中国へ旅に言った主人公。そこで出会った美しいガイドさんに誘われ西の砂漠へ美味しいワインを求めに行く。書くにあたって中国の料理を勉強しました。

第一章

西の砂漠で

大学に合格した時だった。僕は中国に旅行に行った。前から行きたかったからであるがいい機会だった。中国といっても広い。僕は西の方へ行った。西安へ向かった。一人旅である。

西安はあつては長安といった。前漢や隋、唐の頃には都であった歴史ある街である。長い歴史を誇るだけあつて見るべきものも多いだろうと思つていた。そこで漢詩に出て来るような風景を見たいと思つていた。飛行機の中ではそのことばかり考えていた。降りるとガイドさんが出迎えてくれた。一人旅だがガイドさんはつけてもらったのだ。やはり知らない場所で一人なのは色々心配だったからだ。

北京に降りる。まずはここで一日過ごすことになる。ホテルに入る前に街に出た。ふと何かを食べたくなったのだ。

「北京というと何がいいですかね」

僕は中国生まれのガイドさんに尋ねた。この人は上海の生まれで二十代半ば程の美しい女性である。黒い髪を後ろで束ねてうっすらと化粧をしている。黒く切れ長の目が印象的だ。

「北京ですか」

「はい。ここでは何がいいですか」

中華料理といつても色々ある上海料理に広東料理、四川料理、そして北京料理。僕は日本では広東料理をよく食べる。海の幸が好きだからだ。広東料理は比較的海の幸を使った料理が多いのである。

「そうですね」

問われたガイドは首を傾げて考え込んだ。

「私の生まれは御存知ですね」

「はい」

僕はそれに答えた。

「上海ですよね」

「はい」

ガイドさんも答えた。

「あそこだと蟹や豚バラを使った料理が有名なのですけれど」

「東坡肉ですね」

「そうそう、あれは美味しいでしょう」

「ええ。僕も大好きです」

僕がそう答えるとガイドさんも喜んでくれた。

「油っこいですけど」

「あれで油っこいですか」

「少なくとも僕には」

「そうですね。それは参りましたね」

ガイドさんはそれを聞いて腕を組んで考えだした。

「何故ですか」

「いえ。北京料理も日本の方には結構油っこいものがあると思います。東坡肉で油っこいといいますと」

「そんなにですか」

「まあ食べ物には色々ありますけれどね。あっさりしたものもありませんよ」

「どんなのですか？」

「まあ一言で言うつと麵ですね。あと餃子ですか」

「水餃子でしたね、ここでは」

「ええ、そうですね」

彼女はそれに応えた。

「よく御存知ですね。日本の方はよく焼き餃子と思われるのですけれど」

「まあ食べることには興味がありまして。水餃子も好きなんですよ」

「だったら安心ですね。じゃあ食べに行きますか」

「はい、お願いします」

こうして僕達は二人で店に出た。そしてガイドさんの薦める店に

入った。

「ここがいいですよ」

「ここですか」

見ればわりかし豪華な外見のレストランである。中に入っても赤い色で彩られている。これは神戸や長崎で見る店と同じである。

「赤が多いですね」

「元々中国では縁起のいい色ですからね」

ガイドさんはそう教えてくれた。

「こうしたお店にはよく使われるのですよ」

「そうですね」

「ええ。日本ではわりかし大人しい色が使われますよね」

「はい」

実際日本の蕎麦屋等はそうである。落ち着いていい。

「それは逆ですね。私はこっちの方がいいです」

「そうしたものですか」

「お酒も美味しいですしね」

そこでそう言っただけ笑ってきた。

「飲みますか？ここは美味しいお酒がありますよ」

「お酒ですか」

それを聞いて考え込んだ。実は僕はこの時まだ二十歳ではなかったのである。

「どうしましょうか」

「飲めますよね」

だが彼女はそれを知らない。僕にそう声をかけてきた。

「ええ、まあ」

断る暇もなかった。僕はそれに応えた。

「ビール位なら」

「ビールですか」

彼女はそれを聞いて少し残念そうだった。

「あれはお酒には入らないと思いますよ」

「そうなのですか」

「少なくとも私にとっては」

「御客様」

ここでウェイターが声をかけてきた。中国語なのでは何と云っているのか詳しいことはわからない。

「はい」

ガイドさんが応対してくれた。中国語でやりとりが行われる。どうも二人の発音が違う気がする。上海語と北京語の違いだろうか。だがそれでも言葉は通じているようであった。

「お待たせしました」

ガイドさんは話を終わると僕に声をかけてきた。

「それではこちらに」

「はい」

ウェイターさんに案内されて店の中を進む。赤い店の中でガイドさんの青い服が目につく。見ればわりかし地味なスーツだ。スカートの丈の長めだ。だがそれがやけに似合っていた。逆に僕の黒っぽい服が場違いにも思えた。赤と黒は合うと思っていたが常にそうだとは限らないようだった。それともこの黒が悪いのだろうかと思っ

た。

(どうなのかな)

僕は自分の服を見た。見れば完全な黒ではない。茶色も混ざっている。厳密には黒に近いダークブラウンである。どうもこれがいけないらしい。原色には原色が合うということか。見れば彼女の服は原色である。そこに秘密があるらしい。

「着きましたよ」

そこで彼女の声がした。

「こちらです」

「あ、はい」

それに気付いて彼女に顔を向ける。もう僕に席を勧めていた。

「では御言葉に甘えまして」

「どうぞ」

僕は席に着いた。彼女はその向かい側に座った。丁度対面する形となった。

「それでさっきのお話の続きですけどね」

「お酒でしたよね」

「はい」

彼女は頷いた。

「私は強いお酒が好きなんですよ」

「強いお酒ですか」

「そう言われてもどうもピンとこない。」

「中国ではどんな強いお酒がありますか」

「老酒ですね」

「ああ、コーリヤンから作るやつですよね」

「はい。あれは強くていいですよ。どうですか」

「ううん」

問われて考え込んだ。

「どんな強さですか」

「日本酒より少し強い位ですかね」

「そうなのですか」

それを聞いてさらに深刻にならざるを得なかった。

「どうしたのですか？お悩みの方ですかね」

「いえ、実は」

僕は話した。実は日本酒以上のアルコール濃度の酒を飲んだことはないのだ。

「そうだったのですか」

「そもそもお酒自体にまだ慣れてはいないですし」

「それは残念ですね。けれど日本のお酒は飲めるのですよね」

「はい」

僕はそれは認めた。

「あまり飲んだことはないですけどね」

「けれどそれなら大丈夫だと思いますよ」
そう答えてくれた。

「大丈夫とは？」

「いえ。ワインのことです」

「ワインですか」

「飲まれたことはありますよね」

「はい」

何回かある。あまり高いものは飲んだことはないが。

「それなら大丈夫ですから」

「それはアルコール濃度のことですか」

「ええ。日本のお酒より薄いものもありますし」

彼女はそう言った。

「味も。ほら、日本のお酒って癖があるでしょ」

「ええ。あれもちよっと」

どういうわけかそれで日本酒は駄目なのだ。いい酒なら違つというがそれでも駄目だった。どうも酒というものは飲む者を選ぶものらしい。

「老酒もそうですからね。私はそうではないですけどね」

「羨ましいですね」

「あら、そうですか？」

そう言われると嬉しかったらしい。晴れやかな顔になった。

「実はお酒好きなのですよ。日本のお酒にも興味がありました」

「そうなのですか」

「甘くて。甘いお酒っていいですよね」

「リキュールとかああいいう甘さではないのですね」

「あれはあれでいいですね」

笑顔でそう答えてくれた。

「そうですか」

「はい。カクテルも好きですよ」

どうやら酒なら何でもいいようだ。だが僕も油っこくない食べ物

ならそうであるので差はない。食べるか飲むかの差だ。その何処が違うのかという返答に窮する。

「とりあえず北京料理では………。そうですね」
彼女は考え込んだ。

「羊もよく食べますからね。それですと赤はどうでしょうか」
「赤ですか」

「ええ。肉には赤でしょう」
「まあそう言われていますね」
今一つよくわからなかった。そういうものだろうか。

「お魚には白。これは御存知ですよ」
「というと広東料理には白でしょうか」

「さあ、それはどうでしょう」
だが彼女はそれには懐疑的だった。面白そうに笑った。

「何かあるのですか？」
「広東料理も結構バリエーションがありました。ほら、家鴨も食べるでしょう？」

「はい。あれは美味しいですね」
僕も家鴨は食べたことがある。鳥に似ているがもつと味が濃くて独特の味になっている。好きな食べ物の一つだ。

「それに飲茶もありますからね。それで赤の方が合うかも知れませんが。あくまで料理ごとによって違います」
「そうですね」

そういえば中華街で広東料理の店に入った時赤ワインと一緒に料理を堪能している人がいた。だがそれで僕はふと気がついた。

「あの」
それでまた声をかけた。
「何でしょうか」

「中国ではワインから作ったお酒がありますね」
「桂花陳酒ですね」

「そう、それです。あれはどうなのでしょうか」

「ワインに比べると気取ったものに思えますね。花びらを入れて作るものですから」

「そうですね」

「あれはあれで独特の味わいがありますよ。ですがワインとは別物のような気がします」

「そうですね」

「ええ。味も違ってきていますしね。それよりもワインに話を戻しませんか？」

「あ、はい」

ここで麺と水餃子が運ばれてきた。それぞれ一皿ずつ僕達の前に置かれた。

「まあ食べながらお話ししましょう」

「はい」

箸を手にして食べはじめた。まずは麺を口にする。

「どうですか？」

彼女が尋ねてきた。味である。

「美味しいですね」

僕は率直にそう答えた。

「日本のラーメンとはまた違いますね」

「そうですね。実はあれをはじめて食べた時はびっくりしましたよ」

「びっくりしました!？」

「はい。何て変わった和食だ、と。普通日本ではスープは鰹節や昆布からとりますね」

「スープ? ああ、はい」

僕はそれを聞いて納得した。だしのことを言っているのだ。

「それがトリガラや豚骨なんですから。しかも麺も私達のものに似せていてそれで違いますし」

「確かに」

今日の前にある麺を食べながらそれに応えた。

「味はかなり違いますね」

「そうでしょ？こんな変わった食べ物が日本になるんだって不思議でしたよ」

「はあ」

「食べてみると美味しいですけどね。かなりあっさりしてしまいたけれど」

「あっさりですか」

「北京料理に比べれば。あ、そうそう」

「ここで何かに気付いたようである。」

「羊はとうですか？さっきお話していた」

「羊ですか」

「美味しいですよ。どうぞどうぞ」

「ううむ」

それを聞いて少し考え込んだ。羊は嫌いではない。匂いが苦手という人もいるが僕はそうではない。だが一つ問題点があるのだ。

「油っこくないですよね」

「それはこちらで選びますから。安心して下さい」

「わかりました。それではお願いします」

「はい」

こうして羊料理も頼んだ。その時にワインも頼んだ。赤である。

「中国のワインの歴史は古いですよ」

彼女は中国のワインについて話をはじめた。

「唐代にはもう飲まれていましたし」

「そうなのですか」

「ほら。さっき桂花陳酒のお話をしましたね」

「ええ」

「あれは楊貴妃が好きでした。よく飲んでいたそうですよ」

「へえ、楊貴妃が」

「はい。まあ最近までポピュラーではなかったのは事実ですけどね」

「けれど最近では中国でもワインを生産していますよね」
「それを今から味わって欲しいのです。宜しいですか？」
「喜んで」

そこで羊料理とワインが運ばれてきた。丁度麺と水餃子を食べたばかりなのでいいタイミングだった。

羊料理は野菜と一緒に煮たものであった。肉がかなり大きかった。
「緑の野菜ですね」

「ええ。苦手ですか？」

「いえ、野菜も好きなので」

そう答えてまずは野菜を食べる。青梗菜のようだ。

「これも美味しいですね」

「それでは羊を」

「はい」

言われるまま羊を食べる。柔らかくその旨味が口の中全体に広がった。

「これはまた」

「どうですか。北京の羊はいいでしょう」

「はい」

本心からそう答えた。彼女はそれを見てにこりと微笑んだ。

「私は上海人ですけれど」

「はい」

「それでも北京の羊料理は好きなんです」

「そうなのですか」

「美味しいものはね。どの国のものでも美味しいでしょ？」

「はい」

その通りである。同意した。

「美味しいですね、確かに」

「ワインもいいですよ」

見ればグラスにもう注がれていた。赤い宝石がそこにたたえられていた。

「それでは」

彼女はそう言いながらワインを手に持った。

「女の私が音頭をとるのはどうかと思いますが」

「いえ」

僕もそれに合わせた。ワインを手に持った。そして杯を打ち合わせた。

そして飲む。口の中にワインの香りと味が漂う。

「どうですか？」

「うっん」

飲み暫く経ってから答えた。

「いいですね。もっと癖のあるものかと思いましたか」

「美味しいでしょ、中国のワインも」

「ええ」

素直にそう答えた。

「美味しいですね。すっきりしていて」

「けれど北京で飲むよりもっといい場所があるのです」

彼女は誘うようにしてそう言った。

「いい場所とは？」

「これから私達が行く場所です」

そしてそう答えた。

「西安へ。行かれるのですよね」

「ええ、勿論」

それに答えた。

「その為にここへ来たのですから。中国に」

「わかりました」

それを聞いて頷いてくれた。

「それでは明日向かしましょう。けれど今日は」

「はい。心おきなく飲みましょう」

「そういうことです」

こうして僕達はその店で心おきなくワインを堪能した。そしてそ

西の砂漠で

れからホテルに戻った。一晩寝た後空港に向かった。そして西安に向かった。

第二章

西安はかつては都だった。今では古都の落ち着いた雰囲気の中にある。唐代の繁栄を思わせる建物も残っていた。僕は空港に降り立つとまずそれ等の建物を見た。

「こつしてみると歴史ってまだ生きているんですね」
「そうですね」

ガイドさんは僕の言葉に相槌を打ってくれた。

「中国はね。歴史も古いですから」

「はい」

「歴史の影響は確かに残っていますね。特にこの街は」
「隋や唐の都でしたし」

「日本でも知られているんですね」

「それはね」

僕はそれに答えた。

「有名ですよ。僕も一度来てみたいと思っていました」

「来てみた感想はどうですか？」

「悪くないですね」

僕は答えた。

「いや、いい感じですね。気に入りましたよ」

「それは何よりです」

微笑んでくれた。

「じゃあ行きますか」

「あれ、何処かへ行くんですか？」

「ええ。ワインを美味しく飲める場所に行きたいと仰っていましたよ」

「はい」

「そちらへ行きましょう。少し遠くなりますがいいですか？」

「はい」

僕はそれに同意した。

「それじゃあ行きましょう。いいですか」

「美味しいワインが頂ければ」

「それでは」

こうして僕達はその美味しいワインが飲める場所へ行くことになった。西安から汽車に乗り蘭州へ向かった。どんどん西へ向かっていった。

「丁度シルクロードを通っているんですね」

「そうですね。かつては馬で行った道を今汽車で行っているのです」

ガイドさんはそう説明してくれた。

「どうですか。こうした旅も悪くないでしょう」

「いやあ、それはどうでしょうか」

「何かあるのですか？」

「実はね。あまり汽車は好きではなくて」

「あら」

「それよりも車の方が好きなのですよ」

「それは申し訳ありませんでした」

それを聞くと謝罪してきた。

「こうした旅も悪くはないと思っていたのですが」

「何かね、揺れるじゃないですか」

「はい」

「それが好きではなくて。けれど」

「けれど」

僕はガイドさんに窓を眺めながら答えた。

「この景色はいいですね。見ていて飽きません」

「飽きませんか」

「はい。帰りもいいですか」

「ええ、貴方さえ宜しければ」

「それではそれでお願ひします。とりあえずは何か食べますか？」

「そうですね」

彼女はそれを聞いて考え込んだ。そして駅に止まると何かを買ってきてくれた。見れば饅頭に似た麦で作った食べ物であった。

「饅頭ですか？」

「餅です」

彼女は首を横に振ってそう答えた。

「麦を練ったものを焼いたのです。中国ではわりかしポピュラーなものですよ」

「へえ、これが餅ですか」

話には聞いていたが見るのははじめてだった。見れば中々美味そうである。

「一ついいですか？」

「幾つでも。二人で食べようと思って持って来たのですから」

「あ、有り難うございます」

それを聞いて礼を言わずにはいられなかった。

「気を使って頂いて」

「これも仕事ですから」

そう言うのにこりと笑った。

「どうぞ。遠慮なさらずに」

「はい」

薦められるままそれを手にとり食べる。食べてみると美味かった。パンや饅頭とはまた違う味だ。

「これも美味しいでしょ」

「そうですね」

どうも相槌ばかり打っているような気になった。

「けれど本当に美味しいです」

「中国は北の方ではあまり米は食べないのです。採れませんから」

「そうらしいですね」

それは聞いてはいる。今は少し変わってきているらしいが。大体南北で綺麗に分かれるらしい。これも聞いていると面白い話であった。日本とはまた違う。

「ですから麦を食べるんです。そこはヨーロッパと同じですね」
「ですね」

「上海ではお米が主食ですからね。私も最初見た時はびっくりしました。話には聞いていましたが」

「同じ中国の人でも驚くものですか」

「そうですね。だってお米がありませんから。日本の人が冷えた御飯を食べるのも信じれませんか」

「冷えた御飯？」

それを聞いて動きを止めた。一体何のことだろうかと思った。

「それは何のことですか」

「ほら、あるじゃないですか」

彼女は持つている餅を食べ終わると手振りを交えて話をはじめた。
「御飯を握って丸めて。あれを見た時は何で冷えた御飯を美味しそうに食べているんだって思いましたよ」

「ああ、あれですか」

それを聞いて納得した。

「あれはおにぎりですよ」

「おにぎり」

「はい。日本人の好物の一つです。ああしたら食べ易くて美味しいですよ」

「そうですね」

「海苔を巻いてね。食べたことはありませんか？」

「まさか」

慌てて首を横に振った。

「冷えた御飯なんて食べられないですよ。とても」

「食べられませんか」

「いえ、日本人は食べられるのですか？」

「ええ」

訳がわからないが頷いた。

「お握りは僕も好きですよ」

「はあ」

どうも彼女はそれが理解できないようであった。

「どうも私はあれが苦手です」

「苦手」

「中国では冷えた御飯は食べないのですよ。間違っても人には出しません」

「じゃあお茶漬けなんかは」

「？何ですか、それ」

彼女はそれを聞いてキョトンとした。

「聞いたことのない料理ですが」

「あれ、知りませんか？」

それを聞いて逆にこちらが驚かされた。

「ほら、居酒屋なんかによくある」

「居酒屋なら行ったことがありますけれど」

「じゃあそこで食べるのを見たことはありませんか？」

「肴ではなく」

「ええ。何ですか、日本の料理ですよ」

「はい」

それに答えた。

「日本人なら誰でも知っていますけれど。食べたことはありませんか」

「聞くのをはじめです」

「そうですか」

これは正直意外であった。僕はそれを受けて彼女に説明した。

「お茶漬けというのはですね」

「はい」

「冷えた御飯に熱いお茶をかけて食べるものなのですよ。具と一緒に」

「具とですか」

「それは梅干だったり漬物だったり。海苔も使いますね」

「そうなのですか」

「本当に見たことありませんか？」

「ええと」

そう言われて考え込んだ。

「そういえば何処かでそれを見たことがあるような」

「よく居酒屋で最後に食べたりするんですけれどね」

「最後に、ですか」

「まあ気付かない場合もありますね。それは仕方ないです」

「はあ。ところで一つ気付いたのですけれど」

「はい」

「そのお茶は日本のお茶ですよ」

「勿論です」

それにすぐに答えた。

「それが何か」

「いえ。中国のお茶ではそれはできないかな、と思ひまして」

「そうですね」

僕はそれを聞いて考えた。

「無理だと思ひますよ、多分」

「無理ですか」

「はい。中国のお茶はまた日本のお茶と味が違いますからね。それに米も違います」

「米」

「あつ」

僕はそれを言っで自分で気付いた。

「そう、米です」

「米に何かあるのですか？」

「その、冷えた御飯のことですよ」

「さっきのお話の続きになりますね」

「ですね。ほら、日本のお米と中国のお米は違うじゃないですか」

日本の米は言わずと知れたジャポニカ米である。中国はタイやイ

ンドのものと同じインディカ米である。前者は粘りが強く後者はあっさりとしている。これに違いがあるのだ。

「それで冷えた御飯が食べられないんですね。成程」

「何か秘密があるみたいですね」

ガイドさんも興味津々なようであった。

「ええ。中国のお米は日本のものに比べて粘りがありません」

「それはわかります。私も日本でそれを実感しました」

「そうですね。日本の米は粘りがありますからある程度冷えても食べられるのです」

「中国ではすぐに炒飯にします」

「そうですね。あの米はそれによく合っています」

「そうですね」

それを聞いて得意気に笑った。

「炒飯はあれでも難しいのですよ。お米も選ばないと」

「では日本の炒飯は」

「まずまずですね」

「これは手厳しい」

どうやらこのガイドさんは炒飯には一家言あるようである。

「炒飯については一本取られたようですね」

「お米の差というものです」

「そう、お米ですね」

話が都合よく戻った。

「それでお米がそんなふうですからお茶をかけても食べられるのです」

「日本のお米以外でやったらどうなりますか」

「多分サラサラになり過ぎてあまり美味しくはならないのではないのでしょうか」

僕は考えながらそう答えた。

「実際に食べたことはありませんが」

「そうですね」

「はい。まあ食べたことがないのでどうだったかは言えません。すいません」

「いえ」

そして今度はお茶に話を移すことにした。

「お茶ですけれど」

「中国のお茶は日本のものとは全然違いますからね」

「ですね。種類は多いですがピュラーなものに限っても。間違ってもお米にかけて食べるようなものではないです」

「はい」

「我が国では茶粥なんかもありますけれどね」

「お粥にお茶を入れるのですか」

「お茶で味つけをしたものです。奈良名物です」

「奈良………。ああ、日本の古都の一つですね」

「行かれたことはありますか？」

「一度だけ」

答えながら不機嫌な顔になった。

「あの鹿には参りました」

「ははは」

それを聞いて笑わずにはいられなかった。

「あの鹿は酷いでしょう」

「はい」

思い出したらしい。慥然とした顔になった。

「何故あんなに凶々しいのですか。しかも食べ物に卑しいですし」

「甘やかしたせいでしょうね」

僕は率直にそう答えた。

「甘やかした」

「はい。あの鹿は神様の使いとされているのですよ」

春日大社の神獣だ。昔は奈良の鹿を殺すと死刑だった。今でも罰金をとられる。甚だ理不尽な法律ではある。

「それで大切にされているのですね」

「奈良の人には嫌われていますけれどね」

「でしょうね」

納得してくれたようであった。

「見ていたらからかった人にやり返すし子供のお弁当は取るしお菓子でも何でも勝手に食べるし。どうにかならないのですか」

「どうにもならないでしょうね」

どうしようもない。そう答えるしかなかった。

「ですからあれは相手にしない方が身の為ですよ。蛇頭と同じですから」

「その通りですね。今度からは相手にしません」

「そうそう」

そうするべきだ。我ながらいいことを言った。

「それでお茶ですけれど」

「はい」

話をお茶に戻した。僕達はそんな食べ物や飲み物の話をしながら蘭州に向かうのであった。一日たつぷり電車で揺られた後で到着した。疲れてはいたが食べ物の話をしていたので気分はよかった。

その日は現地のホテルに泊まった。部屋は別々だ。そしてそこから車で砂漠に向かうことになった。

車でどれだけ行っただろう。ようやく砂漠に着いた。車から降りるとガイドさんは僕に対して声をかけてきた。

「ここです」

「ここですか」

「はい」

彼女は答えた。

「ここがワインを飲むのには一番いい場所です」

「はあ」

見れば何処もかしこも砂ばかりである。何故ここが一番いい場所なのかよくわからなかった。正直ガイドさんの言っていることがわからなかった。

「ここがなんですね」

「はい」

尋ねるとすぐに答えが返ってきた。

「ここで間違いありません」

「そうですか」

やはりよくわからなかった。どうしてこのような場所がワインを飲むのに最適なのか。からかわれているのではないか、とも思った。だがどうやら違うようである。

「まずはこれをどうぞ」

そう言つて手に持っていた大きな鞆から何かを取り出した。箱、そして紙に覆つて大事そうになおしてあつた。それはガラスのグラスであつた。

「ワインを飲む為のものですね」

「はい」

彼女はまた答えた。

「これで飲んで下さい。絶対にです」

「何故ですか」

「ここが砂漠だからです」

彼女はそう言つた。そして車から椅子を取り出した。二つある。僕達はその椅子にそれぞれ向かい合つて座つた。彼女はそして僕にまた言つた。

「それではワインを出しますね」

「はい」

鞆からワインを取り出してきた。赤いワインであつた。

「赤、ですか」

「ここで飲むのは赤しかありませんから」

「そうなのですか」

「はい」

やはりどうしてもわからなかった。僕にはそれが何故かやはりわからなかった。

「どうぞ」

ガイドさんは僕のグラスにワインを注ぎ込んできた。そして僕はそれを受けた。手馴れた手つきであった。

赤い液体がグラスに注がれる。僕はそれを受けながらワインを見た。赤い世界がその向こうに映っていた。砂も空も何もかもが赤かった。

僕のグラスに注ぎ終わると自分のグラスに注ぎ入れた。そして二つのグラスがこの深紅の世界に覆われた。僕達はその深紅の世界を打ちつけあった。

「では乾杯」

「はい」

僕はガイドさんに言われるままグラスを合わせた。そしてそのワインを飲んだ。砂漠の焼け付くような日差しの中それを口に入れた。「おや」

僕はそれを一口飲んだところで思わず声をあげた。それはレストランで飲むよりもずっと美味しく感じられたからだ。

「美味しいでしょう？」

「はい」

僕は答えた。グラスの向こうにいるガイドさんはにこやかに笑っていた。赤い世界にその笑みが映っている。少し不思議な世界であった。僕はその世界から彼女を見ていたのだ。

「ここはね、特別な場所なんですよ。ワインを飲むにあたって」

「どうしてでしょうか」

ちにかくそれがわからなかった。問わずにはいられなかった。そして僕は問うた。

「漢詩は御存知ですか」

「漢詩!？」

「はい。多分学校の授業で習ったと思いますが」

「ええ、それなら」

特に唐代の詩は覚えている。杜甫や李白の詩は暗記させられた程

であった。記憶関係の授業は得意だったので漢詩のテストもよかつたと記憶している。得意科目と言ってもよかつた。

「確か絶句とかそうしたものでしたよね」

「はい。その絶句で王翰の詩なのですが。涼州の詩を御存知でしょうか」

「涼州の、ですか」

「この辺りのことを詠ったものですが。学校では習わなかったのですか」

「ええ、すいません」

残念ながら記憶にはなかった。白楽天や王維の詩なら知ってはいるが。あとは春眠暁を覚えず、のあれであろうか。こうしてみるとどうも僕の漢詩への知識はまだまだ乏しいようである。

「そうですか。それでは説明しますね」

「はい」

「この詩はこの西方での戦いを詠ったものなのです。西方で戦いに出ている兵士達のことを」

「あ、そういえばここはかつては国境でしたよね」

「ええ。ほら、ここから暫く行ったら万里の長城がありますよね」

「はい」

見れば遠くに見える。まさかこんなところにまであるとは思わなかったが。まさしく長城であった。

「あれの向こうには異民族がいましたから。ここでは彼等との戦いが絶え間なく行なわれていたのです」

それは唐代だけではない。中国が秦により統一される前から彼等との戦いはあった。そして長城があった。秦の始皇帝は彼らを防ぐ為にその長城を延長したのであった。そして彼等を防いだ。異民族達は騎馬民族であった。その馬を防ぐ為の壁であったのだ。これは中国の境の象徴でもあった。秦が滅び漢になり、隋や唐になってもそれは変わらなかつた。やはり北の騎馬民族との戦いが行われ長城が築かれた。あの長城は境であると共に戦場でもあったのだ。

「そうした場所から生きて帰れる兵士はそうそうおりませんでした。激戦地でしたしね」

「はい」

そうだろう。異民族との戦いは熾烈を極める。ましてや相手は精強な騎馬民族である。そんな戦場においては命を落とすことも稀ではないだろう。

「そんな中で兵士達はこのワインを飲んだのです。ほら、ここは交易の道でもありますね」

「はい」

所謂シルクロードだ。

「西域のものも手に入ったのです。それがこのワインと」

「ガラスの杯ですね」

「そういうことです」

彼女は笑顔でそれに応えてくれた。

「このワインはその兵士達と西のことを思うお酒なのです。ですから他の場所で飲むよりも美味しいものとなるのです」

「成程」

わかったような気がした。飲んでみれば確かに違う。何か西の方から風すら感じる。心地良い風であった。

「ふう」

ワインのほかには何も無いのに酒が進む。自然と口に入っていく感じであった。グラスに注がれていく酒が次々と消えていく。僕もガイドさんもまるで水を飲むようにワインを飲んでいく。黄色い砂の世界がまるで黄色い花々のように感じられる。こうして見ればここはここで幻想的な世界であった。

「お酒だけで宜しいですか」

「といたしますと」

ここで尋ねてきたガイドさんに顔を向けた。おそらく今の僕の顔は酔ってかなり赤くなっているだろうがガイドさんは相変わらずであった。白い顔のままである。

「音楽なぞどうですか」

「音楽ですか」

僕はそれを聞いて暫く考え込んだ。

「何がありますか」

僕はポップスが好きである。だが生憎今回の旅行には何も持って来てはいない。持って来ればよかったと思っっているがそれも後の祭りであった。

「琵琶があります」

「琵琶が」

「ええ。実は私琵琶を弾くことができてまして」

「それはまた」

意外なことであった。どうもこの人は案外多芸な人のようである。

「琵琶も西から伝わってきたものなのですよ」

「ほお」

それは意外だった。

「どうですか、一曲」

「お願いします」

僕は頼んだ。すると彼女は暫くしてから琵琶を鳴らしはじめた。

砂の世界に流麗な曲が流れはじめた。

「ふう」

僕はそれに耳を側だてた。聴いているとそれだけでまた酒が飲みたくなった。僕はまた飲んだ。

「貴女も」

ガイドさんにも薦める。すると彼女は一旦手を止めてそれを口に入れた。あつという間に飲み干してしまった。

「どうも」

飲んでから礼を述べてくれた。そして今度は自分で入れて飲んだ。

「ワインにはこうした曲も以外と合うでしょう」

「そうですね」

確かにその通りであった。飲んで聴いてみてそれが実感できた。

これは不思議なことであるように思えた。何故ならワインは欧州の飲み物だからだ。そもそも中国で飲むこと自体が最初は場違いに思えたというのに。

「それにこうした場所で」

「ええ」

耳をそばだてる。実に心地良かった。

「あつ」

また風が来た。それが頬を撫でた。

「どうですか、貴方も」

ガイドさんは琵琶を僕に薦めてきた。僕はそれを受ける気になつた。

「それでは」

そしてそれを受け取った。試しに少し鳴らしてみた。

「あれっ」

僕は琵琶を鳴らしたことはない。だが今は不思議な程奏でることができた。それが不思議だった。

「上手いですね。経験があるんですか？」

「いえ」

そんな筈がない。それがどうして。僕には不思議でならなかった。琵琶が自然に鳴るようであった。

琵琶の声が砂漠に聴こえる。僕はそれを聴きながらまたワインを楽しんだ。そして異境でそれを心から楽しむのであった。

西の砂漠で

完

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5367a/>

西の砂漠で

2009年2月17日08時08分発行